

J. R. Soeder

*Kontingenz und Wissen. Die Lehre von den
'futura contingentia' bei Johannes Duns Scotus*

Ashendorff, 1999, 305 S.

小 川 量 子

スコトゥスの「未来の偶然的な出来事の知」に関する問題は、S. Knuuttilaにより様相論理の面から可能世界論の先駆けとして評価されて以来、多くの研究者の注目を集めているが、著者はたんに論理的側面に注目するのではなく、アリストテレスの問題提起に対する中世における解決の歴史性を考慮し、偶然性に関するスコトゥスの理解を存在論と認識論の両面から綿密に読み解こうとしている。この問題を扱うスコトゥスのテキストは、ヴァチカン版の全集には初期の *Lectura I d.39* だけが収められ、*Ordinatio I d. 38/2-39* の部分は欠落したままになっているが、巻末に弟子の手でまとめられたと考えられる *Apograph* が載せられている。この *Apograph* はスコトゥスの真の著作とは確定できないが、スコトゥスの主張をかなり忠実に伝えるものとして今日多くの研究者に支持されていることから、本書もそれに依拠してそのまま利用している。さらに著者は、スコトゥスがパリ大学で行った講義の弟子によるノートで、スコトゥス自身により生前に確認された *Reportatio Examinata* と呼ばれる *Reportatio I Ad.38-40* の写本をスコトゥスのテキストとみなして、本書の巻末にその校訂版のテキストを掲載している。

この *Reportatio I A* はこれまで一般の研究者が利用できなかったテキストであるので、本研究の特徴はそれに基づいてスコトゥスの最終的な立場を再構成しようとした点にあると言える。しかしながら、本論では主に *Lectura* の論述に即してまとめられ、*Ordinatio* の *Apograph* と *Reportatio* によって細かい理解を補うかたちを採り、三つのテキストは根本的にはほとんど異なることが確認される。ただ、著者は註のいくつかの箇所、スコトゥスにおいて我々の意志決定が神の意志によって先立って決定されている点を強調した D. Langston や M. Sylwanowics の解釈を、彼らが *Reportatio* を参照しなかったために犯した誤りと捉えていることから、Re-

portatio をスコトゥス解釈を分けるテキストと評価していることは明らかである。このような指摘は、すでに同じく Reportatio I A に基づいた A. Wolter や W.A. Frank の研究でなされており、著者の見解は彼らに従ったものであるが、ここで Reportatio だけに見られる特徴とは、神と人間の意志が二重に人間の意志決定を偶然的に原因する原因として並行関係にあるように捉えられている点である。そこで、もし Reportatio を読まなければ、神の意志がすべての偶然的に働く原因の偶然性を根拠づける第一原因として語られている点だけから、決定論的な側面が強調されることになる。著者は考えるが、はたしてこの記述だけで D. Langston らの決定論的解釈が否定されるかは問題であるし、いかにして神の意志は永遠においてすべての存在を原因する上位原因でありながら、人間の意志決定を決定することなく、人間の意志が働くのと同時に働く部分的原因でありうるのかという新たな問題を生むことになる。というのも、我々がある事柄を意志する瞬間に、神の意志も人間の意志も同じく未規定で *indifferens* の可能性をもちながら、互いの意志決定に左右されずに、同一の事柄を同時に決断するとしても、それはあたかも偶然の一致のようにはしか捉えられないからである。

このような Reportatio に見られる神と人間の意志の同時的協働性の理解は *Lectura* に見られるスコトゥスの永遠の現在と時間的現在の同時的共存という理解と深く関連している。すなわち、本書の扱う三つのテキストでスコトゥスは、永遠において過去—現在—未来の全時間が同時に神の知性に現前することに基づいて予知の必然的成立を捉えるポエティウスやトマスの立場に反論し、永遠である神にとっても、未来は先立って実在せず、現在しか現前しないとするのである。このように未来が現在に先立って必然的に決定されているという決定論を避けることにより、我々が意志する現在と同時に神も働いていると考えることになるが、このようなスコトゥスの見方も永遠を時間的に解する危険性を孕んでいる。というのも、もし時間的な出来事が時間的にそのつど神によって原因されて、現在として存在するかぎり神に現前するとするならば、神は時間的な事柄に時間に即してそのつど関係するように捉えられ、永遠の時間に対する超越性が失われるからである。そのため、*Ordinatio* の *Apo-graph* と *Reportatio* では、永遠の現在が時間的な現在と同時に共存すると語られる際に、永遠と時間との存在論的差異に配慮し、神の意志が永遠性において我々の決断する時間的な現在に無限に超越していることが強調されている。しかし、問題なのは、

これらの二つのテキストにおいて、時間的な現在だけが実在するものとして神に現前するかぎりで現実的關係が成立すると言明されている点である。スコトゥスは、Lectura および Ordinatio の他の箇所、神と時間的存在との間に相互的な現実的關係は成立せず、被造物の神への関係は現実的關係であるが、神の被造物への関係は観念的關係にすぎないと考えている。したがって、時間的存在にとって同時に永遠なる神が実在するというように、時間的存在の側からは根源である神への現実的關係が常に認められるが、神が時間的存在を前提とするように、時間的現在が神に現前することに基いて神が時間的存在に対して現実的關係をもつことは認められない。

一方スコトゥスはこの問題において、未来に対する神の予知の可能性を永遠における神の意志決定が神の本質に反映することから理解し、神は自己を認識することにおいて時間的な事柄を知ると考えるので、現実には起こっている現在をそのつど新たに知るとは考えてはいない。したがって、スコトゥスの場合、トマスのように神は全時間を現在として知るわけではないが、すべての出来事を時間的に区別されたものとして不変的な仕方では自己において認識するのであり、今起こっている現在だけではなく、未来の出来事も未来に現実化することとして知るわけである。したがって、未来も可能性において現実的な意味をもつことになる。このようにスコトゥスも予知の確実性を認める以上、神の意志決定が実現されることは何によっても妨げられないと考えるので、神の意志決定は我々の意志決定によらずに、それに先立って成立することになり、結局 Langston らが指摘した予知論のアポリアは解決されない。すなわち、神は未来を時間的に先立って知るのではないが、それが起こると自ら決めた時に必ず起こることとして永遠において知るのである。しかし、永遠なる神において、今現実には起こっていることとまだ起こっていないことがいかにして区別されるのかと考えると問題は振り出しに戻ってしまう。

このようにスコトゥスの初期の著作である Lectura I d.39は、スコトゥスの独自の観点を顕著にあらわすと同時に、容易に解決しがたい問題点をも含んでいる。通常スコトゥスは Lectura で論じたことを、より精密に Ordinatio で論じているのに、この問題に関する Ordinatio の箇所を空白のままに残したのは、スコトゥス自身が Lectura における自らの解決に疑問をもち、自己の最終的立場を提示できなかったからとも考えられる。実際、Ordinatio の Apograph も Reportatio も、スコトゥスの真作に比べると、細かく丁寧に整理されて論じられ、一見分かりやすい印象を与え

るが、そのことはかえってスコトゥス以外の手が加わっていることを暗示しているのかもしれない。これらのテキストでは、スコトゥスの問題点をできるだけ少なく見せようとする苦心は感じられるが、問題に新たにに取り組む姿勢は欠けている。現段階では、いずれのテキストもスコトゥスの著作とは確定できないため、簡単にスコトゥスの最終的立場とみなして取り扱うには問題があり、今後慎重に検討されていかなければならないと思われる。本書はこれらのテキストがスコトゥスの立場を忠実にあらわすものと信じ、スコトゥスの解決の妥当性についても論じていないが、それだけに Lectura I d.39の問題性と他のテキストの文献学的研究の必要性をあらためて強く認識させる研究となっている。

本書の最後に掲げられた Resume では、テキストに添った細かな分析に終始する本論とは対照的に、大胆なスコトゥスの形而上学の哲学史的な位置付けが提示されている。著者は彼の指導教授である L. Honnefelder に従って、スコトゥスの形而上学を实体を中心とした形而上学から、カテゴリーを超越した超範疇的概念 *transcendentia* に基づく *Transcendentalwissenschaft* としての形而上学への先駆けとして理解し、バロックの近世スコラを経て、ライプニッツからカントに到る近世哲学への影響力に言及する。ただこのような超範疇的概念に基づく形而上学理解は、もともとアヴィケンナに遡るものであり、トマスやヘンリクスも同じく影響を受けているので、「存在するかぎりでの存在」に関わる学としての形而上学の体系的理解がスコトゥスによりはじめて構想されたわけではない。しかしながら、本論との関連で著者は、ヘンリクスのイデア論的な神の知の理解に対するスコトゥスの批判が、ポエティウスやトマスにおける神の知の理解にも同じくあてはまることを指摘し、そこにスコトゥスの哲学が従来の哲学と根本的に異なる観点を見出している。すなわち、スコトゥスは真理を実在する対象との一致ではなく、実在の可能性を産み出す根源的な神の意志によるものとして理解する点で、神の意志決定の偶然性のうちに世界内のすべての存在者を超越する存在の可能性を提示したという著者の評価は、スコトゥスの形而上学の現代的な意義を示す興味深い解釈であると言える。
